

# さとみやげ

服部貞子

## 柿の花

私は片足を石段におろしかけたまゝ、擴がらうとした洋傘の手も躊躇つた。

ほろりとまた、目路やゝ遠いところに響は消える、日かげの土の黒きを打つ音の、その幽かなのを、その床しいのを、どうしてこの足音に打ち消すことが出来やう。私は其床しい響を、聞き洩らすのを恐れて立ち窘んだ。

立つて居るのはわが實家の、頽れかゝつた裏門の石段である。苔蒸したこゝにも、葉かげの限りは柿の花の、古きは濃い茶に、新らしきは白く、萼の緑りに彩られて落ち散つて居る。

黒板塀に背中を合せて造られた一連の長家は、見る

からにむさ苦しく、屋根の草も可なりに延びて居る。

壁の落ちかゝつた端の家の前の、いぢけた檜扇の咲きかけた井戸端には、中古の印半纏を着た男が後向きに蹲んで居た。研ぎものとは其體のゆらぎでも知れる。傍に置かれた手水鉢の水は白く濁つて居た。

柿の花は頻りに落ちた。もの靜かな晝である。

ふと目の前に人影が立つた。ひよろりとはして居るが、八つか九つ位らしい男の子、青ぶくれた顔の眉毛は薄く、小さな目はどんよりとして何の働きもない。形の剥げた行丈の短い筒袖を着て、小さな其目でつくづく私の顔を見て居る。何の積りか藁を嚙んで居た。

私も凝視して居た。暫くするとふら／＼と柿の木の下の横切つて、研ぎものをして居る男の方へ行つて其前に突つ立つた。着物の臀が赤黒く汚れて居た。

男は一寸顔をあげたが、

「なんだ勝う……うゝむ？」

と氣のなさ／＼に言つて、また兩腕に力をこめてごしごしはじめる。

二三日前まで、今は空家になつて居る端の家に居た車

夫の倅で、家賃の滞りで逐ひたてられてからも、毎日  
ふら／＼と遣つて來るといふことは昨日聞いた。馬鹿  
でおまけに無籍者だといふ。

晴やかな六月の日は額に熱くなつた。私はふと新町  
の伯母訪ふと出掛けたことを思ひ出して石段を降りた。

柿の花散る、柿の花散る！と、歌になりさうな想ひ  
を繰り返しながら、道を曲らうとして、またなんとは  
なしに振りかへつて見た。

—— あゝ、あの子はまだ立つて居る。

## お豊

雨は降る、降る。

小棲はとつたが、駒下駄にはねあがる飛沫の、素足  
なれば殊に氣持ちの悪るいこと甚しい。今少し小降り  
になつてからと婆はとめたけれども、俄に人ないところ  
で靜かに考へて見たくなつたので、番傘を借りて  
暇をつげた。

裏口から裏口へと敷きつめた炭俵は、踏まるゝ度に  
濁水が浸みあがる。いつ晴れさうもない梅雨は、じわ

じわと傘を打ち、袖を濡らした。

婆は見送つて居る。と思ふと、其目に涙のあるのを  
知つて、婆を慍れむのか、お豊を悲しむのかはたまた  
我身を憐れむのかたゞなんとも知れぬ涙が胸にこみあ  
げて來た。

檐には露切ると細引をひいて、桑が枝のまゝかけら  
れてあつた。皆蠶室に行つたと見えて、母屋には一人  
の影も見えなかつた。廊下を通つて離れに入つたがそ  
こも檐は桑のために暗い。大儀な軀を横へて私は吐息  
をついた。

今更にお豊の昔が思ひ出される。

お豊は私を姉様と呼んで居た。年は二つばかり多か  
つたが、恐ろしく老成たところと無邪氣なところとの  
ある女で、常にふい／＼と面白いことばかり言つて人  
を笑はせて居た、其顔付手付がまた可笑かつたので、  
私はいつも苦しくなつて、腹を抱へては逃げ出したも  
のだつた。

お豊は字が一字も見えなかつた。貧困つて困つて、  
貧窮り抜いた頃に育つたので、學校へもあげられず、  
十一の時から在方に子守にやられてしまつた。さうし

てやう／＼家に歸つたのが、確か十六位の時であつたらう、大きな中剃りと、眞黒い顔と、其言葉とは、暫らくの間笑ひの種となつて居た。その頃は、私の家でおろしてやつた資本ではじめた豆腐屋が、めき／＼と都合よく行つて、兎も角も喰ふに困るやうなことはなかつたので、お豊もそれから家に居ることが出来るやうになつた。併し一年の半分は私の家で暮したといつても宜い、此頃のやうな養蠶時の忙しい時は勿論さもない時でも、一日に一度や二度は必ずやつて来て、そしては人を笑はせて行く。尤も家は近かつた。

お豊はまた何でも眞似が上手だつた。芝居の眞似よし、源水の口上、人の癖でも何でもござれ、人が大笑ひするのを見て自分も喜んで居た。かくした女に誰も眞面目な相談を仕かける者はなかつたので、自然世の中の事情に疎い……といふよりは、すべての思想が極く幼稚だつた。

私はお豊が大好きだつた。お豊も私を好いて、私の言うことはなんでも感心して聞いた。喧嘩はよく毎日のやうにしたけれども、短い前掛をしめたお豊は、目尻の下つた兄の子を負ふつて、すぐにこ／＼とやつ

てくるのが常だつた。

お豊は縁が遠かつた、見事に發達しきつた肉體は徒らに着物の行きを短くさせた。彼女も來年はもう廿三になります、と婆がよく母の前に首を曲げるのを見たが、其頃、人知れぬ戀に敗れて居た私には、大きな體をして子供を背負つて歩くお豊が、せめてもの慰めであつた。私は祖母の秘蔵娘、その顔色を覗つて、思ふても言ひ得ない。爲し得ない義母の仕打ちが氣に入らず、拗ねて／＼、數ある良縁も我から無茶に斷ち切つた。

新婚の人の交情ひ、情に驅らるゝ無智な男女の驅け落ち、こんなことが話題にのぼる度に、お豊はいつも皮肉な、腹の皮を縷らせるやうな茶かしを入れた。文字なき者の常として、其言葉は露骨に過ぎたけれども、悶へては人も呪つた其頃の私には、それが、何事かを復讐し得た時のやうな冷笑み泛ぶ心持ちに聞かれたのであつたが……お豊は家出した。或る夜お豊は或る男と手をとつて駆け落ちした。

出し抜かれたやうな腹立たしさに、私は其時お豊を信じて居た自分の心を嘲笑つた。いつともなしに胸に

抱いて居た處女の矜り、其力の弱いのも知つて、間もなく私も平凡な生涯に入った。

お豊の子は二つになつた。薄暗い佛壇の前にいんこして、ちゆうく／＼澤庵を嚙つて居た子の、氣味悪るい程細い手足、ぶつ／＼と腫物のふき出た大きな頭、思はず胎毒の恐ろしきに身を慄はしたが、婆は此子が可憐しいと指さして泣いた。二年目にぶらりと歸つたお豊は、腰のたゝぬこの子を置ざりにして、間もなくまた飛び出したといふ。

身内を環る不安、慵さ、味氣なさ、梅雨の鬱陶しさは此身に堪え難い。

常ならぬ體故と人は言ふけれども。

### 卯の花垣

「何家へ？」

下梳のお仙ちゃんが、荷物を前掛にまるめ込みながら膝をついて顔を見る。

「……相原さんに昨日あがらないでしまつたから

……」

先で縛れて支へた毛を手をかけてひいて、

「少し順が悪るいけれども」とすつとまた梳く。

お仙ちゃんは出て行つた。横目で其後姿を見やうとして居ると、

「いかゞでせう？」

と前髪を持つて鏡を見て居る。

「相原さんて謂へば、あのお得さんが養子に行たんだつてねえ」

と私は其事を思ひ出して、鏡に云つた。

「はあ、あのさうなんですよ……」

と饒舌る用意に唾を一つ飲んで、

「なんだか此頃評判悪るくつてねえ……且那樣と出来てるんですつて」

すつ／＼と手際よく毛筋を使つて、鬢の毛を結んでさげる。

「いやだ……オホ、いくらなんだつて」

私は思はず失笑した。

「いえ、眞實なんですつて……」

と眞顔でちらと鏡を見て、

「あの奥さんが亡くなつてから、あとを二人まで貰

つたつたんですがね、お徳さんが極道ごくどうつて居られないんですつて。その後の人あとは郡山ごうりやまなんですが亭主ていしゅがね、あんまり道楽者だいらくしやなんで愛憎あいそをつかしてこつちへ来たんださうですがね、その通りだから一月と居られないんですあ、さればつて夫婦の縁を切つて来たもの今更おめおめ歸られやしませんしね。あの何、大野屋……今大野屋のお針になつて居ますがね、私はあゝ、いう伶俐りりょうな娘に初めて遇ひましたつて言つてますよ。それはそれは極ひどいんですつて……』

ぎゆうと締めた元結もとむすを一寸嘗なめてまた結ぶ、私はたゞ微笑わいごうんで居た。

「あのもと高久田たかひさだから行つた陽一やういちさん……とかいつたつけあの人は今矢つ張り米國べいこくに居るの？ あの人と取り合せる積りせきりなんですしよ」

「いえ、いえ、あの方はもうすつぱり縁が切れてるんですつて、今ぢや立派りつぱなお医者様になつて子供もあるさうですよ、大變彼國あつちはお金になるんですつてねえ……」

で、今度は話が其方にうつるかと思ふと、また、「なに、にしても評判へいぱんですからねえ、皆みななが言いんで

すからねえ、まんざら嘘うそでもないかも知れませんよ……いつ行つても眞つ白まじろくお白粉しろこをつけて」

「だつてまさか……」  
私はやつぱり笑つて居た。

取り合はないので一寸また鏡を覗ねめたが、頭に差した毛筋けすぢを抜いて、そのまゝ黙まつて鬚まげを搔かきはじめる。

鏡かみの面おもてが暗くくなつて来た。降ふるのかしら、と思ふ間もなく、雨呼あめよぶ風がさら／＼と、竹の葉たけのはに鳴る。

「へえ前髪まへかみを……」

とやがて私の手に鬚搔まげかきを渡した。

それから二日ふつかばかり過ぎてのこと。

私は伯母おばの家からの歸り相原醫院の脇の道を通つたふと此間の髪結かみむすひの話はなしを思ひ出して、背せの低い、赫あから顔かほの、産科さんかを得意とくいとしてゐる、時世後ときよごれの醫者いしやと、同じ系の相原あいはらといふ、白い髭ひげの生なへた士族ししゆの家に生れたお徳おとくさんと思つて、彼様あんなな話は嘘うそだらうと思つた家の裏うらには、昔むかしながらの小さな石いしの祠ほこらに、色の褪さめた赤あかい木綿もめんの幕まくらが張かられて、それを圍かこんだ卵たまごの花はなの垣かきは眞つ白まじろに咲さき亂みだれて居た。

「こい／＼／＼／＼」

突然人の聲がする。今まで蹲かかんでゝも居たか、垣根近くにすらりとしたお得さんが立つて居た。お得さんは挿花はなの友達、きちんとした人で、いつも唇の皮が乾いて割れてる人だつけ、こんなことを思ひながら、私は一寸笑顔を見せた、そしてまた彼様あんな噂は嘘だらうと思つた。

ころ／＼と鈴の音ねを立てゝ、むく／＼とした小犬が其足許たはむに戯たはむれて居る。

私は其犬が欲しかつた。

\* \* \* \* \*

御無沙汰のお詫つたなまでに拙いものをお目にかけます。實家に歸つてかれこれ一月、かうした筈ではありませんでした。祖母の主張さとで實家ごんかと婚家との間に再三の手紙の往復、つひ身み二つになるまでは其里さとにとゞまることになりました。蠶かいこは今四眠しみんを覺めるところ、家内の者皆手古舞てこまひをして居ます。ではこれを里さとだよりの第一信とも。さよなら。

六月廿日  
道子様

郭公ほととぎすなく里にて、澄子

【入力者注】底本は総ルビですが、一部のみ残しました。

初出・底本…「女子文壇」明治四十一年七月十五日

テキスト入力…小林 徹

公開…令和六年三月七日

[リンク…「作品年譜」](#)

[水野仙子ホームページ](#)